

戦争遺跡保存ネットワーク高知『高知の戦争 証言と調査』第十九号
(二〇一二年十一月)から

高知海軍航空隊と 同隊の三里と窪川の飛行場

藤原 義一

大東亜戦争（アジア太平洋戦争）のころの一九四五年夏、高知県の高知海軍航空隊の飛行場は三つありました。香美郡日章村（いまは南国市^{なんこくし}）に高知海軍航空隊の飛行場がありました。そして、高知市の三里^{みさと}の秘匿^{ひたく}飛行場・高知第二飛行場、高岡郡窪川町宮内（いまは四万十町窪川）の秘匿飛行場・高知第三飛行場です。それらが、どんなものであったか。いま、それらの施設の何が遺跡として残っているかを歩いて確認していきたいと思います。なお、高知海軍航空隊の敷地は、いま高知龍馬空港、高知大学農学部、高知工業高等専門学校になっています。高知第二飛行場跡には、温床栽培や促成栽培のビニールハウスがたくさんあります。高知第三飛行場は田んぼや畑などになっています。（引用文中の「」の中は藤原の注です）。

「三島村に、海軍の飛行場をつくること……」

大日本帝国海軍は、一九三九年、高知県香美郡三島村に飛行場を建設することを決定しました（三島村は、一九四二年七月一日、日章村と野市町に編入されました）。

翌一九四〇年、西川豊馬・三島村村長は、広島県の呉の海軍鎮守府に呼び出され、三島村に海軍飛行場を建設することをいわたされています。

一九四一年一月二十三日、西川豊馬村長は、村民有志を三島小学校講堂に集めて高知県知事の通達を伝えました。

「三島村に、海軍航空隊の飛行場をつくることが決定した。田の中に赤い旗が立てられている範囲内の者は、みんな立ち退いてもらわんといかんことになった。誠に急なことで村民に申し訳ないが、戦争に勝つために協力してもらい、本日承認ねがいたい。直ちに立ち退きに取りかかってほしい」

誰も反対できる人はいませんでした。

接收面積は約二百十二ヘクタール、三島村の七割に上ります。接收地域には村役場や三島小学校など三島村の中心施設も含まれていて、村は消滅しました。(移転したかたの名簿があります。奴田原栄助、吉本富雄「旧三島村に旧海軍航空隊建設に伴い、移転した方の名簿」『南国史談』第十二号。南国史談会。一九九二年四月)。

三島小学校が解体され、児童たちは、二人がけの机を隣の立田村の立田小学校に運びました。

津波、洪水の時に村人が避難し、命山と呼んでその信を集めた室岡山(標高二八・二メートル)には、坑道が掘られ、爆弾で崩されました。豊かな農をもたらした秋田川も埋め立てられました。

いま、南国市の高知龍馬空港の外の南側に日章開拓農業協同組合が一九八五年三月にたてた「開拓記念碑」がたっています。

そこには三島村接收の時のことが刻まれています。

「この地は…元の三島の里である沃土よくとは農を興し、黒潮に恵まれて文化の香り高く、県下屈指の優良村として栄えた。…その三島村が海軍の基地建設用地になり」総面積

二千百八十四反を接收、二百六十三戸、千五百余の住民ら急遽撤去を命ぜられる。人々

互いに別れを惜しみ父祖の霊位を抱き、慌ただしく村を去る」

この土地の買収、家屋移転は、高知県が担当しました。建設工事は、内務省神戸土木出張所、重要施設の建設は海軍設営隊が分担してすすめました。(三國雄大『高知海軍航空隊 白菊特別攻撃隊』。群青社。二〇〇一年)。

飛行場建設の最中の一九四一年十二月八日、昭和天皇は、アメリカ、イギリスなどとの戦争を始めました。大東亜戦争(アジア太平洋戦争)です。

陣山通信所もつくられました

高知海軍航空隊から北へ七キロメートルの長岡郡長岡山陣山(いまは南国市陣山)に、同航空隊の通信部門を受け持つ通信所をつくりました。このことは、香長ゼミナル編『証言 陣山通信所爆発の記録(改訂版) 市史も新聞も書かなかった大惨事』(香長ゼミナル館。二一年)が書いています。

海軍省が、このための土地を買収します(一九四二年十一月十四日、一九四三年五月二十五日、同年六月七日など計三・七ヘクタール)。電柱を三本つなぎあわせた高い柱が三本立って、アンテナが張られました。敷地の中央に教室五室くらいの建物があり、通信機器が備え付けられ、飛行場からは有線で結ばれていました。

一九四三年ころから、ここから約一キロメートル北方の小山・陣山に横穴壕を掘りました。ここの建設は海軍の兵士が担当しましたが、朝鮮人労働者も使われていたようです。この壕は、コンクリートで上塗りされ、完成し、通信機器も備え付けられ、電波を発信する準備はととのいました。

高知海軍航空隊が開隊しました

一九四四年三月十五日、練習連合航空総隊第十三連合航空隊管轄下の偵察術練習航

空隊として高知海軍航空隊が開隊しました。機上作業練習機・白菊（乗員五人）が配備されました。また、滑走路（主滑走路は、コンクリート舗装で長さ千二百五十メートル、幅六十メートル）、格納庫、兵舎などは、建設工事中でした。

翌月一日、三重海軍航空隊から乙種飛行予科練習生十八期三百人入隊（飛行術練習生三十七期）。

同年六月一日、松山海軍航空隊宇和島分遣隊から甲種飛行予科練習生十三期三百人、鹿児島海軍航空隊から甲種飛行予科練習生十三期百五十人、乙種（特）予科練習生四期百五十九人が入隊（飛行術練習生三十八期）。

前浜、久枝の土地も接收して……

一九四四年六月、いまの南国市の前浜地区、久枝地区の五十七万四千二百平方メートルも接收されました。高知海軍航空隊の掩体えんたいと誘導路（幅約四十五メートル）を建設するためです。

掩体は、航空機をアメリカ軍の空襲から守るための格納庫です。

掩体や誘導路の建設には、地元の女性、高知市内の中学校の生徒、高知刑務所の受刑者、強制的に日本に連れてこられていた朝鮮人も駆り出されました。

高知新聞社のカメラマンだった浜田豊繁さんも、掩体づくりに動員されています（浜田豊繁『一発勝負 報道カメラ50年』。高知新聞社。一九七四年）。

「日章飛行場口高知海軍航空隊の飛行場のこと口での、えん体造りもつらかった。敵の爆撃から飛行機を守るため周辺の田んぼにコンクリート製、カマボコ型のえん体を造り機を収納する。

慣れぬ水田に入り、すねの上まで泥まみれになっての作業だ。だが、私たちと比べようもないほど地元の人はつらかったらう。

なにしろ、なによりも大切な田を飛行場にとられたのに、またえん体の用地としてとりあげられ、きつい作業も率先してやらねばならぬ。しかも、周りの田は踏み荒らされるで、なに一つよいことはないのだが、ぐちを聞いたことがなかった。われわれに対しても『新聞社の方、ご苦労さんです。記念に一枚撮ってくださいませんか』と笑顔で話しかけてくれる。もちろんパチリと写してあげた。

一日の作業が終わり『ご苦労さま』と農家の方から頂いたおにぎりはうれしい極みであった。おまけにイモを一包み土産にもらって帰り、家族一同が大喜びした。「掩体と誘導路は網の目状に結び、航空隊内の滑走路に通じさせました。」

動員されていた高知市の私立土佐中学校の三年生の生徒たちは、前浜国民学校（いまは大湊小学校）のすぐ北の掩体をつくる作業をしました。

高知海軍航空隊の兵舎に泊り込んで作業しました。

兵舎の廊下を拭く作業をサボっていたら「海軍精神注入棒」が尻にとんできました。掩体は、こうしてつくりました。

土で掩体と同じ大きさの小山をつくります。そして、大勢の人々がその上にあがって踏み固めます。固めた土の上に、筵むしろやセメント袋などを敷き詰めます。土の上にセメントを流し込み、塗り固めます。セメントが固まったら、中の土をすべて取り除きます。こうして掩体ができあがりします。

この掩体は、農道と農業用水路の真上につくられました。

海軍高知航空隊は、この水路のかわりに直径約二十センチメートルの土管を設置しようとした。

それでは雨天のときの水はけが悪く、上流の田んぼに支障が出そうでしたので、地元もとの農民たちが海軍航空隊側に、もっと大きな径の管に取りかえてほしいと申し出ました。

相手の技術責任者は「何をいうか、お前たち。敵は一刻も待ってくれないぞ。そん

なことが聞けるか。お前たちは非国民か。二度というな。帰れ」と、農民たちを追い返しました。

高知海軍航空隊の周辺には、コンクリート製九基、土などでつくられたもの三十二基の計四十一基の掩体がつくられました。

中央の滑走路からそれぞれの掩体までは東西三本、南北四本の幅約四十メートルの誘導路がはりめぐらされていました。

戦後、土などでつくられたものは解体され、コンクリート製のものも二基が壊されました。

いま、南国市にはコンクリート製でドーム状の掩体が七基残っています。田んぼの中の市有地にある七つのこんもりした掩体。一番大きい掩体は高さ八・五メートル、幅四十四メートル、奥行き二十三メートル、コンクリートの厚さは五十センチはあります。

戦後、農民たちは、大湊小学校の近くの掩体の後部を打ち抜いて、道と水路を通しています。

いま、この掩体の内側には、つくったときの、筵むしろとセメント袋の跡がはっきり残っています。

掩体をつくっている最中、高知海軍航空隊の兵隊たちは増えていきます。

一九四四年八月一日、鹿児島海軍航空隊から甲種飛行予科練習生十三期百三十人が入隊（飛行術練習生三十九期）。

翌月一日、松山海軍航空隊から甲種飛行予科練習生十三期二百九人が入隊（飛行術練習生四十期）。訓練増強のため飛行分隊を二個分隊としました。

官百六十人、兵員三百六十人、機上作業練習機・白菊（乗員五人）五十五機が配置されました。

高知海軍航空隊での飛行機事故

高知海軍航空隊での飛行機事故の記録があります。

一九四四年十月十四日、白菊の二機が県下の岩村の上空で接触し、墜落しました。計十二人が亡くなりました。

以下の人です。

海軍中尉	春名	俊介	兵庫
海軍中尉	大賀	亘	新潟
一等飛行兵曹	清家	半三郎	愛媛
二等飛行兵曹	中庭	四三郎	群馬
二等飛行兵曹	肥後橋	謹吾	福岡
二等飛行兵曹	後藤	勝人	大分
二等飛行兵曹	大津	豊	大分
二等飛行兵曹	植松	慎二	広島
二等飛行兵曹	吉田	豊	広島
二等飛行兵曹	大串	惣次郎	佐賀
二等飛行兵曹	小島	高明	長崎
二等飛行兵曹	愛甲	徳生	鹿児島

同月二十三日、第四分隊機がエンジン不調で海上に不時着しました。この事故で一人がなくなっています。

前者については、いま南国市包末地区かふえに地元の住民らによって慰霊碑が建てられています。

碑文はつぎのような内容です。

「太平洋戦争が苛烈を極めた昭和十九年十月十四日旧高知海軍航空隊練習機二機が飛行訓練中空接触し包末部落のこの地点より北東五十米の地と松本部落三百五ノ一番地に墜落十二名の若者が無念の最期を遂ぐここに殉国せし十二霊の平安と永遠の平和を祈念してこの碑を建つ

昭和六十一年十月十四日

包末部落建立」

いっぽう、高知海軍航空隊の隊員は、増えていきます。

一九四四年十一月一日、奈良海軍航空隊から甲種飛行予科練習生十三期の四百五十人が入隊します（飛行術練習生四十一期）。

この十一月、高知海軍航空隊でも練習機のガソリンがアルコール燃料に切り替わっています（出原恵三「高知海軍航空隊と関連遺跡」 高知大学人文学部「臨海地域における戦争と海洋政策の比較研究」 研究班編集『臨海地域における戦争・交流・海洋政策』。高知大学人文学部「臨海地域における戦争と海洋政策の比較研究」 研究班。二〇一二年八月十日）。

一九四五年二月十七日、上海海軍航空隊から飛行分隊と飛行術練習生四十一期五百人が転入します。

浦戸海軍航空隊がつくられました

ここで、少し舞台を高知市池、仁井田地域に移します。

仁井田の県道14号脇の高知市三里墓地公園の右手の角に「納骨塔」があります。高知市役所三里出張所長・細川恒久さんが一九四四年十一月に建立したものです。こんな文章が刻まれていました。

「池及口および口仁井田地域ニ海軍施設ノタメ区域内ノ墓地移転ヲ命セラレタル所

工事ノ急速ヲ要セシタメ墓地所有者ヲ精密ニ調査スルノ違口いとま口ナク当時引取人ナキ墳墓ヲ発掘シ此所口ここ口ニ納骨ス」

この「海軍施設」は、浦戸海軍航空隊のことです。

この建設にあたっても家地、耕地、山林、墓地が徵発され、四十四戸の全住民が他の地域に四散せざるを得ないはめに追いこまれました。

そして、一九四四年十一月一日に浦戸海軍航空隊が開隊しました。

「ここは、飛行場を持たない海軍航空隊でした。

高知海軍航空隊は特別攻撃態勢に

一九四五年二月下旬、高知海軍航空隊の空気が変わります。このころ、特別攻撃隊員の募集があつたからです。

翌月一日、高知海軍航空隊は、第十航空艦隊に編入されました。飛行教育訓練は中止になりました。

そして、三日、第五航空艦隊に編入されます。

その日の夕方、高知海軍航空隊では、特別攻撃の要員が発表されました。木下五郎大尉（海軍兵学校六十八期）が隊長。海軍兵学校・予備学生出身の将校三十人、下士官七十人の計百人（操縦、偵察各五十人）。そして、若干の予備員。白菊五十機で編成されました。三月五日、特別攻撃組の下士官は、それぞれ衣嚢いのうをかついで第二飛行隊の兵舎に移動。第一飛行隊、第二飛行隊の下士官約七十人が同じ甲板（フロアのこと）で生活することになりました。（『三国雄大』高知海軍航空隊 白菊特別攻撃隊』）

そして、特別攻撃の訓練が開始されます。

操縦、偵察が各一人ずつ搭乗するシステムをとりました。最初は昼間、薄暮の定着訓練、ついで降下訓練、薄暮飛行、夜間飛行へとすすんでいきました。降下訓練では、

高度八百メートルから三十五度で緩降下します。高度三百メートルで「投下用意、テッ」の合図で機首を上げます。機体はそのままどんどん下に落ちていきます。高度五十メートルくらいまで落ちて、機体はやつと上昇を始めます。(三国雄大「高知海軍航空隊 白菊特別攻撃隊」)

アメリカ軍のグラマン艦上攻撃機が攻撃

一九四五年三月十九日朝七時ころから午後零時ころにかけて、アメリカ軍のグラマン艦上攻撃機が三波にわたって高知海軍航空隊を空襲しました。

掩体の近くの畑で野菜を手入れしていた男性の農民二人と動員されていた生徒約三十人は、掩体に逃げ込みました。

グラマン機は掩体すれすれに飛んできてバリバリ、バリバリと機関銃を撃ちました。弾が掩体に当たってチュン、チュンと不気味な音をたてます。

そして、近くの前浜国民学校の玄関前、講堂と校舎の西に爆弾を投下しました。

前浜国民学校(いまは大湊小学校^{おおみなと})は休校でした。同校に出勤していた猪野信意校長、教師の永吉高秀さんは、この爆撃中、同校の御真影(昭^{ごしんえい}和天皇と皇后の写真)、教育勅語^{ちよくご}などを持って逃げました。

高知海軍航空隊では戦死傷数人、一式陸上攻撃機と陸上攻撃機銀河が破壊され、格納庫、庁舎、兵舎が一部損傷しました。

掩体と誘導路を建設する工事に動員されていた高知市の高知県立高知城東中学校三年生たちの「合宿飯場小屋」も炎上しました。

同校三年生だった高橋道久さんは「私もグラマンの一番機に銃撃され、横飛びに避けて生れて初めて赤鬼のような顔の米軍パイロットと相互に目礼しあったしまつでした」と記しています(『高知追手前高校百年史』。高知県立高知追手前高校校友会。一

九七八年十一月十九日)。

高知新聞のカメラマンだった浜田豊繁さんによると、この日、グラマン機四機が墜落しました。浜田豊繁『一発勝負 報道カメラ50年』に、そのうちの一機の写真が載っています。

なお、同じ日のことと思われることを高知市朝倉の陸軍連隊の兵隊で防空監視所に配属されていた田中瀧治さんが書いています(「高知城天守閣から見た、日章飛行場の空爆と、空襲による高知市の焼け跡」)『かわら版』第五十七号。飛鳥出版室。一九九五年。田中さんは三月二十九日と書いていますが……)。

この日、田中さんは高知市の高知城の天守閣で同僚と二人で監視にあたっていました。そのとき、アメリカ軍機の高知海軍航空隊への攻撃の様子を見たといいます。

「午前中の立哨□りっしょう□中だと思えますが、東南の海上から□アメリカ軍の□艦載機のグラマンが日章飛行場□高知海軍航空隊の飛行場のこと□付近と思われる所を北上し、大栃□おどち□か美良布□びらふ□上空と思われる所から進路を西にとりました。山田上空を経て、現在の南国広域農業桝線橋付近と思われる所で方向を南に転ずると共に、日章飛行場を目標に少し高度を下げながら、編隊で、何十本という火の棒を吹きつつ飛行場を攻撃しながら海上に出て行きました。同じような編隊で三回ほど空爆を行いました(中略)。

日章は練習機用の飛行場のためか、出撃も高射砲の反撃も見ることができなかったように思います。空襲の様子は詳細、本部に報告しましたが、体は汗でびっしょりだったように思っております。」

高知海軍航空隊は、このほかに五月十四日、六月八日などにアメリカ軍のB 29 爆撃機、空母艦載機グラマンの攻撃を受けました。

いま南国市に残る掩体の一つには、三月十九日のアメリカ軍のグラマン艦上攻撃機によって激しい機銃掃射を受けたときの大小合わせて約六十個の弾の跡がついています。

高知海軍航空隊には高射砲はありませんでした。七・七ミリ旋回機銃と二五ミリ機銃で応戦しました。

いま、高知海軍航空隊の施設としては、つぎのもの跡もあります。

南国市の高知工業高等専門学校南東の物部川堤防にトーチカ跡があります。直径約一メートル、円筒形でコンクリートの厚さは約二十センチメートルです。

近くの高知大学農学部内の草原に指揮所壕跡（こっくわい）があります。

同学部内の北東隅に通信所跡があります。

南国市大堀（おほほり）の国道五五号の南側の吾岡山（ごおかやま）（標高四七メートル）には三か所の横穴壕があります。

同航空隊の北方の南国市陣山に陣山送信所跡。高さ、幅とも二・五メートル、総延長二百三十メートル。壁も天井もコンクリートで上塗りされています。

三里の秘匿飛行場・高知第二飛行場が開設

いっぽう、高知市の三里に高知海軍航空隊の秘匿飛行場・高知第二飛行場（六七一基地）がつくられはじめていました。促成園芸地帯をつぶしての飛行場建設でした。

前出の高知新聞のカメラマンだった浜田豊繁さんも、この飛行場づくりに動員されています（浜田豊繁『一発勝負 報道カメラ50年』）。

「会社の口勤労働員の口割り当てで最も行かされたのが高知市仁井田の飛行場建設である。

このころはセメント不足でコンクリート造りにできず、滑走路も土のまま。地固めして造るわけで連日、大きなローラーを人力で引っぱる。炎熱の日には、日射病ではたばたと倒れたりもした。

アメリカ艦載機の空襲警報があれば、だだっ広い飛行場予定地を逃げまどつ。」

一九四五年三月二十五日、高知第二飛行場が開設しました。

滑走路は延長千八百三十メートル。東部分の約六百八十メートルが幅百七十五メートル、西部分の約千二百五十メートルが幅百メートル。砂利敷きです。

すぐ北側に大平山（標高・一四二・七六メートル）があり、南は海です。

「県道春野く赤岡線（三里支所の前の道路）の南側一帯の松林と畑が収用されて飛行場にかわりました。滑走路の規模は、東西の長さが1、830m、幅が東部分220m・西部分100mでした。地下施設、隧道、掩体もそなえていました。このあたりは、三里が全国に誇る園芸地帯でした。また松林のなかには、先祖伝来の墓地も点在していました。日本軍はそれらの土地を強制接收し、大平山の中腹をけずり取った赤土と砂利を運んで、つき固めたのです。この造成工事には、軍関係者はもちろんのこと、朝鮮半島から徴用された朝鮮人、地区住民、小学生にまでおよびました。」（馴田正満・宮村剛史「三里も『本土決戦』の戦場に」『ふるさと三里 高知市立三里中学校開校五十周年記念誌』。高知市立三里中学校開校五十周年記念誌編集委員会。一九九九年）

近くの浦戸海軍航空隊は、任務が変わりつつありました。

高知市池地区に浦戸海軍航空隊跡の碑（一九八五年四月六日に甲種飛行予科練習生第十四期会、第十五期会、第十六期会が建立したもの）にも、そのことが刻み込まれています。

「当地は旧浦戸海軍航空隊の隊門跡である。予科練とは飛行予科練習生の略稱で旧海軍航空機搭乗員である。この採用制度は昭和五年に設定され全国より選ばれた少年達はよく鉄石の訓練に耐え無敵の空威を發揮したが連合軍沖繩に迫るや全員特別攻撃隊となり、祖国の繁栄と同胞の安泰のみを願いつ、肉弾となり敵艦に突入し、その八割が若桜で散華したのである。浦戸航空隊は昭和十九年十一月一日開隊されたが、昭和二十年五月に入り愈々本土決戦必至の戦況のもと練習生は敵を水際に撃砕すべく日

夜陸戦特攻訓練に終始し身を以口もつ口つて国難に殉ぜんと決するも（以下、略）」

浦戸海軍航空隊は、途中から陸戦隊に変わり、呉鎮守府第十一特別陸戦隊くれちんじゅうふになりました。高知の沿岸部の須崎、宇佐、浦戸、長浜、手結、室戸に陣地をつくっていました。

この隊の岡村虎彦さんたちは、三里国民学校（いまは三里小学校）の講堂に寝泊まりし、浜で上陸してくるアメリカの上陸用舟艇に爆弾を抱えて体当たりする訓練をしていました。

当時の様子を、三里の種崎中区に住み、高知市三里国民学校に通っていた中川功さん（一九三三年七月十二日生まれ）が教えてくださいました。

「飛行場をつくっていた所は、砂地の畑でエンドウマメなどを植えていました。

いまの三里中学校あたり（当時、この学校はありませんでした）に掘って小屋ができました。そこに朝鮮人たちが三十人くらい住んでいました。平屋で十くらい建っていました。一棟に二世帯が入っていました。男の人たちは三十歳台、四十歳台の人ばかりでした。その子どもたちが四、五人、私たちの学年の男組にいました。その子どもたちは日本語ができました。

掘って立て小屋の男性たちが飛行場づくりをやっていました。近くの大平山のふもとから土を切りとって、それをトロッコに乗せて運び、飛行場の予定地に入れていました。トロッコには二人くらいが乗っていて、入れ終わったら、その二人が山のほうについていました。トロッコのレールは二本ついていたように思います。

三里国民学校の南の松林の松も切られました。飛行場づくりの資材にしたと思います。

できあがった飛行場には、ときどき二つ羽の飛行機が飛んできて、しばらくしたら飛び去っていきました。黄色っぽい色をしていました。

飛行場には、ほつたらかしの飛行機も一機ありました。乗りこえて行って『どんな

材料でつくつちゅうろつ』と思って機体の胴体の一部をひっぱかしてきたことがあります。それは網目の布で上に染料を塗っていました。そんなもんで日本勝つかなと思いました。」

「三里国民学校へ行くときは集団登校でした。通学のときはワラソウリか裸足でした。靴をはいた記憶はないですね。防空頭巾を持っていきました。左胸には白い布に何年何組、だれだれと書いたものをつけていました。級長は肩に赤い布を副級長は肩に黄色い布をつけていました。二か月に一度くらいクラスにテニスボールのようなボールを一つか二つ、年に一回はクラスに一足か二足、長靴がきます。くじびきでした。

私は、よく当たっていましたが、ボールも持って帰ったら、ゴムの質が悪いので、もうひしゃげていました。長靴ははいて帰っていたら、もう穴があいていました。」

「三里国民学校の裏には防空壕がたくさんほってありました。子どもたちがいいるためです。たいていの家にも自分たちの防空壕をほっていました。うちにも中庭にありました。父がつくったものです。砂地ですから大変でした。木材で枠をつくって六畳くらいの地下壕をつくりました。」

「三里国民学校の校庭では女性や、おじさんたちが竹やりの訓練をしていました。年配の男性が指揮をとっていました。」

「種崎の千松公園チマツコウエンに深さ一メートルほどのタコツボが何十も掘ってありました。松の根元の海岸とは反対の北側に掘ってありました。兵隊が、ここに入っていて、アメリカ軍が海から上陸してきたら、ここから飛び出して攻撃するということだったでしょうが。」

「種崎の私の家のちよつと南の畑の中から飛行場をつくっている所の西端の手前までの平地に深さ約一・五メートル、幅約一・五メートルに掘り込んだ壕のような直線の道ができていました。クワ畑の中も通り、家の横も通りという感じでした。まわりの人のいうには、兵隊が斥候や連絡のためにここを走るといふことでした。斥候道と

でもいっしょのしょうか。真っ直ぐで近いので、私たちは、これをよく通って学校に行きました。」

これは、いまも県下各地の山や神社、寺に残っている軍隊の交通壕こうごうのようです。

「種崎の北側(浦戸湾)には造船工場があり、鉄の輸送船、上陸用舟艇もつくってました。試運転で海を走っていました。緑色のアオガエルみませ(御畳瀬基地)の特別攻撃用ボート・震洋しんよう(もしょっちゅう走っていました)。」

「浦戸海軍航空隊の海軍の兵隊が、ときどき割り当てられた各民家にやってきて一泊していきました。制服を着て。一人ずつです。私の家にもきていました。下士官が来たときもあります。乾パンや缶詰を持ってきてくれました。寝る間もなくしゃべったり、空襲警報が出たら一緒に防空壕に逃げたり。朝の四時、五時には歩いて帰りました。」

「種崎は、造船所があつたせいか空襲はしゅっちゅうでした。アメリカ軍のグラマン機、大きな飛行艇がきました。昭和十九年の半ばのことでしょうか、造船所の近くに男の友だち三、四人と釣りにいってグラマンに狙われたことがあります。近くの民家に飛び込みました。近くに爆弾を落とされました。直径二十メートルくらいの穴があきました。ホケがたっていました。熱い鉄片がたくさん散らばっていました。幸いに、みんな無事でした。二十年に入ると毎日のようにB29が来ました。室戸のほうから音がして、私たちの上をとおりぬけていきました。昼見たのですが、B29が幅二センチメートル、長さ四十センチメートルくらいの銀片を落していました。何千も。電波妨害のためでしょうか。」

なお、いま、高知海軍航空隊の高知第二飛行場の滑走路は壊され、ここには建物やビニールハウスがたくさん建っています。

白菊隊は、沖縄への特別攻撃に参加しました

高知海軍航空隊の当初の目的は偵察搭乗員の養成でしたが、一九四五年春、アメリカが沖縄県に上陸すると、特別攻撃隊員としての訓練が中心となりました。

同航空隊に特別攻撃隊・菊水部隊白菊隊が編成されました。

四月二十日ころから、白菊を特別攻撃機用に改装しはじめました。二百五十キロ爆弾二つを搭載して沖縄のアメリカ艦船に体当たりするためでした。機内に設置されていた電信装置を取り外し、零式戦闘機用の増槽タンク（ベニヤ製。燃料補充用で、ガソリン百八十リットル入り）を積みこみました。出撃基地の鹿児島県鹿屋から沖縄までは約六百キロメートルあるので、白菊の燃料タンクだけでは不足するのです。燃料は片道分だけでした。機関銃は装備しませんでした。乗員は、操縦、偵察の二人の予定でした。偵察員は、増槽タンクに馬乗りになって搭乗することになっていました。（三国雄大『高知海軍航空隊 白菊特別攻撃隊』 など）。

四月三十日夜も悪天候のなか、夜間飛行訓練が実施されました。風が強くなり、途中で訓練が中止されました。しかし、カチ七一六号機、カチ七一七号機が時間を過ぎても帰りませんでした。カチ七一六号機は、五月一日午前零時四十分、高知県高岡郡戸波村（いまは土佐市）の蜂の巣の山中に不時着し焼失。搭乗員四人即死。死者は堤幸造・少尉、代田登一・上飛曹、山中哲雄・二飛曹、柏木秀生・二飛曹。カチ七一七号機は、同日午前零時四十五分、高知県高岡郡北原村（いまは土佐市）の山中に不時着し大破。搭乗員は軽傷でした。なお、カチは、高知海軍航空隊の所属機を示す記号です。（三国雄大『高知海軍航空隊 白菊特別攻撃隊』）

五月二十四日、高知海軍航空隊の白菊夜間特別攻撃隊機が鹿児島県の鹿屋かしのや基地から沖縄に向けて出撃しました。八機未帰還。戦死者氏名、以下のとおり。（三国雄大『高

知海軍航空隊 白菊特別攻撃隊』、財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会『特別攻撃隊』。財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会。二〇〇三年 四版。以下同)

一番機〓操縦・柴原繁一等飛行兵曹、偵察・小堀淳三郎少尉

二番機〓操縦・川端滋一等飛行兵曹、偵察・荒東国夫二等飛行兵曹

三番機〓操縦・水野博上等飛行兵曹、偵察・木戸門一上等飛行兵曹

四番機〓操縦・佐々木威夫少尉、偵察・高橋中少尉

五番機〓操縦・松本真二等飛行兵曹、偵察・小倉敏男上等飛行兵曹

六番機〓操縦・菅原喜三一等飛行兵曹、偵察・野田勉中尉(指揮官)

七番機〓操縦・佐々木重衛一等飛行兵曹、偵察・中根輝治一等飛行兵曹

八番機〓操縦・能見博一等飛行兵曹、偵察・力石權四郎少尉

翌五月二十五日、早暁、高知海軍航空隊の白菊昼間特別攻撃隊が沖縄に向けて出撃。

出撃開始後、途中で出撃中止になりましたが、一機未帰還。戦死者、つぎのとおり。

操縦・西久道二等飛行兵曹、偵察・坂本俊実一等飛行兵曹

五月二十七日、高知海軍航空隊の白菊夜間特別攻撃隊が沖縄に向けて出撃。十二機未帰還。うち一機は、沖縄西方海上に墜落、乗員二人はアメリカ軍の捕虜になりました。戦死者は、つぎのとおり。

一番機〓カチ五二〓操縦・川田茂中尉、偵察・増田幸男一等飛行兵曹

二番機〓カチ五二六〓操縦・横山誠雄二等飛行兵曹、偵察・播本隆夫一等飛行兵曹

四番機〓カチ七一九〓操縦・今野作蔵一等飛行兵曹、偵察・島田常次二等飛行兵曹

五番機〓カチ五一八〓操縦・畠中政人二等飛行兵曹、偵察・渡世保少尉

七番機〓カチ六二九〓操縦・岩崎鐵也少尉、偵察・河本茂男二等飛行兵曹
九番機〓カチ七一〓操縦・篠部克己少尉、偵察・木藤静雄二等飛行兵曹
十番機〓カチ七 六〓操縦・木塚梅夫二等飛行兵曹、偵察・岡田清少尉
十二番機〓カチ六 六〓操縦・市原重雄上等飛行兵曹、偵察・縄野恭平中尉
十三番機〓カチ六二三〓操縦・佐藤新四郎一等飛行兵曹、偵察・安藤廣二等飛行兵曹

曹

十四番機〓カチ五三五〓操縦・牧ノ内幸雄少尉、偵察・後藤春夫二等飛行兵曹
十五番機〓カチ七 七〓操縦・高澤啓次一等飛行兵曹、偵察・前野博之二等飛行兵曹

操縦の佐藤新四郎・一等飛行兵曹（一九二三年十月生まれ）〓宮城県出身〓は、父母あての手紙を書いています。（『三国雄大』高知海軍航空隊 白菊特別攻撃隊）。前半を、いま風の表現に書き改めて紹介します。

「拝啓。

天皇が大東亜戦争を始めて五年。

天皇の国の存亡は沖縄の一戦にあります。神州の男子と生まれて悠久の大義に生きています。何たる光栄でしょう。

一門の名誉は、これに過ぎるものではありません。私は軍籍に身を奉じて三年になり、海軍航空の伝統に徹し後顧の憂いなく、その本分をつくし得るのは一途にご両親のご厚恩よるものと深く信じています。思えば生をうけてから二十三年、何らいたすことなく、何ら幸することなく淡雪の一片と消えていくは遺憾ですが、桜花のように散るのは無上の悦といたす……」

つぎの短歌が書き込まれていました。

大君「おおきみ。天皇のこと」の 御楯「みたて」となりて 沖縄の 空に咲かせん

白菊の花

手紙の最後は「小夜奈良」と、結ばれています。

佐藤一等飛行兵曹は、偵察員の安藤廣二等飛行兵曹（一九二七年九月生まれ）＝静岡県出身＝とともに、海軍記念日の五月二十七日夜に白菊で出撃し、「沖縄周辺」で戦死しました。

佐藤一等飛行兵曹は、出撃の一週間ほど前に、高知市の池内照さん＝一九九三年一月死去＝と結婚していました。

高知新聞のカメラマンだった浜田豊繁は、その「菊水部隊白菊隊」が六月二十一日、高知海軍航空隊から飛び立つのを、同航空隊の近くの物部川ものべがわの堤防から目撃しています（浜田豊繁『一発勝負 報道カメラ50年』）。

「地元農家の人たち三、四十人が見送りにきていた。いずれも航空兵を下宿させている家の方々に、今生いまの別れである。『まっことむごい』とご婦人が身をもむ。（中略）一九〇〇口藤原注・午後七時のこと□特攻隊出撃。航空隊の手のすいた者全員が見送りの位置につく。

総員「帽振れ」のなか、堤防の人々にも見送られて一機ずつ、これも機上から手を振りつつ五機が飛び去った。機が夕暮れの空に消えても、しばらくはだれも動かない。

やがて、海ゆかば水漬みづく屍山ゆかば草むす屍かばね…の歌が皆の口について出て、女性は抱き合って泣き、男たちはこぶしで目頭をぬぐう。

一九三〇、続いて三機が出発した。」

六月二十一日、高知海軍航空隊の白菊夜間攻撃隊が沖縄に向けて出撃しました。その戦死者は、つぎのとおりです。

一番機＝カチ五一＝操縦・針生房吉中尉、偵察・河野直義二等飛行兵曹

五番機＝カチ七三六＝操縦・藤本利雄二等飛行兵曹、偵察・掛川諒二等飛行兵曹

六番機＝カチ六一＝操縦・井上幸胤中尉、偵察・有賀康男一等飛行兵曹

七番機〓カチ五三三〓操縦・粟倉一雄二等飛行兵曹、偵察・佐久間潔上等飛行飛曹
八番機〓カチ七二二〓操縦・古賀一義中尉、偵察・宮澤茂雄一等飛行兵曹

六月二十五日夜、高知海軍航空隊の白菊五機が鹿屋から沖縄に向けて特別攻撃することになりました。「六月二十一日の出撃の際、機体不良で引き返してきた隊員と諸事情により離陸しなかった隊員とに出撃が命じられた」(三国雄大「高知海軍航空隊 白菊特別攻撃隊」)。諸事情で、この日、飛び立ったのは一機でした。

カチ五〇四〓操縦・春木茂一等飛行兵曹、偵察・岩下武二等飛行兵曹

春木、岩下ペアにとって四度目の出撃でした。

すでに六月二十三日に第三十二軍司令官の牛島満・中將は自決、日本軍の組織的抵抗は終わっていました。

明見での陣地づくり、野市での対戦車訓練

高知海軍航空隊の兵隊で、高知県へ上陸してくるアメリカ兵を陸戦で迎え撃つ任務についた人たちもいました。上杉利則さん(一九二七年、高知県土佐清水市窪津生まれ)が、自著『七つのボタン』(南の風社。二〇〇四年)で、その体験を書いています。その記述を追います。

一九四五年三月、同航空隊の飛行教育訓練が中止になってから、上杉さんたちは長岡郡大篠村明見(いまは南国市)の家々に民宿し、山の中腹に陣地のための横穴を掘りました。上杉さんの分隊は、十五メートルくらいの間隔で三つの横穴壕(幅二メートルほど)を掘り、二十メートルくらい掘りすすめた所で、この三つをつなぐ計画でした。

「一メートルくらい掘り進めることに、両側に浅い穴を掘り、松の丸太を立てます。その二本の丸太の上に、同じような丸太を渡し、カスガイでがっちり固定します。次に、両側面の丸太と丸太の間に分厚い板を積み上げて板壁にしていきます。丸太を渡した天井には、これまた分厚く長い板(矢板といいました)をカケヤ口木づちの大きなもので隙間がないように叩き込んでいきます。土石の崩壊や落盤が起こらないように、横穴内は天井も側壁も板で囲まれた通路のようになっていきます。」

この作業は二、三か月続きました。

藤原は、上杉さんの本を読み、二〇二二年十一月上旬、何度か高知県南国市明見に行きました。当時の高知海軍航空隊の足跡が残っているかもしれないと思ったからです。

わかったことを書きます。インターネットで「南国市明見」の衛星写真を出して、見ながら読んでくだされば幸いです。

路面電車・土佐電鉄ごめん線の明見橋電停から南東に行った所に星神社があります。そこを起点に説明します。

当時から、ここに住んでいた人や、戦後、ここに来ていた高知海軍航空隊の兵隊たちと交流のあった人たちから話を聞き、現地を歩きました。

・明見に来ていたのは高知海軍航空隊の二分隊、十二分隊、二十二分隊の兵隊たちでした。

・明見の地域の各民家には高知海軍航空隊の兵隊たちが寝泊まりしていました。ある民家には金属製の長方形の、料理したものを入れるバケツが残っていました。

・星神社の境内は練兵場として使われていました。

・星神社の北西の民家の一角が高知海軍航空隊の炊事場になっていました(いまは、ビニールハウスになっています)。戦後、ここには高知海軍航空隊の使っていた厚い木でつくった冷蔵庫が放置されていました。

・星神社を南に行くとも見の山につきあたります。山のふもとの駐車場の少し上に横穴壕があります。少しを残して入口は塞がれています。

・そこから山のすそ野を左に行った倉庫の裏の一段高くなった所に平らな草むらがあります。そこに高知海軍航空隊の兵舎がありました。板張りの一階建てのものだったといえます。

・さらにふもとを左に行くと、三つ山に入る小道がありますが、それぞれの右手や真つ直ぐ行ったところに横穴壕の潰れた跡があります。

・さらにふもとを左に行くと、山に入る道があり、それを入れてすぐの右手に一段低い平地があります。ここに高知海軍航空隊の兵舎がありました。奥のほうにコンクリート製の井戸があります(いまも水があります)。その向こうに幅数十センチメートル、深さ一メートルくらいの溝があります。地元の人は排水施設だったのではないかとっています。

上杉さんたちは、三つの横穴を奥で結び合わせるといふ仕事を未完成のまま、今度は、高知海軍航空隊の飛行場の隣の物部川を隔てた村落(いまの香美市野市町)に民家に駐留します。

ここでの上杉さんたちは、高知県に上陸するアメリカ軍の戦車を爆破する訓練をしました。訓練の場所は、物部川の土手や草原、作物を植えていない田畑や道路でした。

棒地雷(棒の先端に爆薬を装着したもの)を持って戦車のキャタピラーの下に飛び込む。

円錐弾を持って戦車によじ上り、天井の昇降口のフタを開けて投げ込む。

破甲爆雷はくこうばくらいを背中に背負って戦車の下に飛び込み、爆破させる。

「しかし、実際にはいずれの模型すらなく、手ぶらで、あるいは付近に転がっている棒切れなど持って、それらしき真似事をするにすぎませんでした。」

飛行場の南の砂浜の水際に陣地を築きました。幅二・五メートル、長さ四十〜五十

メートル、両側は四十センチ以上の厚さのコンクリートで固め、その上に丸太を渡し
ました。

上杉さんたちは、ここに潜み、上陸してきたアメリカ軍の戦車をやり過ごし、背後
から襲撃する訓練もしました。

窪川町宮内に高知第三飛行場ができました

窪川町宮内に、高知海軍航空隊の秘匿飛行場・高知第三飛行場（六七一基地）が
つ
くられはじめていました。

この飛行場建設にあたった海軍呉鎮守府第五一一三設営隊（編成・一九四五年六月
十五日。隊長・島本茂技術大尉）の分遣隊長だった西内弘さんが、建設にあたった事
情を書いています（「関西R.P.の会」のホームページの「終戦小秘話」）。

「高知県西南部に窪川町といって、四方を山々に囲まれた閑静な町があり、町外れ
に影野、仁井田という農林業で生計を営んでいる小部落がある（現・土讃線影野、仁
井田駅）。」この物語である。

昭和二十年当時、私は若い海軍軍人であった。呉鎮守府（海軍施設部）より極秘命
令を受けこの辺境地に、海軍航空隊特攻基地を緊急設営するため、分遣隊長として同
期生二名で、部下兵百二十名と共にこの地に派遣された。

昭和二十年当初、高知海軍航空隊基地（現・高知空港）は、B 29・双胴ロッキード・
グラマン機の総攻撃を受け壊滅状態であった。海軍は新基地建設のため、高知市郊外
の浦戸地区に『浦戸海軍航空隊基地』と窪川地区に『特攻機基地』を極秘に、しかも
緊急に設営して本土決戦に備える計画を立案した。

我々百二十名の派遣隊員は秘密裡に本隊を出発、『影野』『仁井田』の二つの小学校
に合宿することになり、当分隊六十名は影野小学校の一隅を拝借して、建設に着手し
た。」

この滑走路の予定地は二十万平方メートルの田んぼでした。

滑走路は、一九四五年（昭和二十年）春から突貫工事で急造されました。

周辺の窪川村、松葉川村、仁井田村などの人たちや高知県窪川農業学校（現・高知県立窪川高等学校）、国民学校高等科の児童生徒が飛行場の整地、地固めのコンクリートローラー（直径一メートル、長さ二メートル）引きなどに駆り出されました。窪川農業学校の生徒だった武市典雄さんも動員された一人です。

田んぼを掘り起して、砂利を敷き、その上に小丸太棒（直径五センチ、長さ二メートルくらい）をシュロ縄で編んでスタレのように敷いて滑走路をつくりました。長さ千百八十メートル、幅百五十メートルの滑走路でした。

「朴の木谷」、「三島様横の谷」、「柳の川谷」の山肌に横穴を掘り込んで掩体えんたいがつくられました。

滑走路から各格納庫までの誘導路をつくりました。

山中の掩体までの通路もつくりました。

宮内の市川和男さんが、当時の様子を書いています（市川和男「四万十川歴史楼 海軍宮内飛行場」＝県老連戦中・戦後の記録編集委員会『平和への祈り 戦中・戦後の記録』。高知県老人クラブ連合会。一九九八年）。

「……私の家の前の田圃たんぼに、五、六名の見慣れない人達がきて、何やら立ち話をしていたのが、当時、十二歳の少年の私には何やら不安げに映ったことを覚えている。そのうち測量の偵察機が飛んだとも聞いたものである。

やがて飛行場は近郷近在の人々を強制動員してつくれた。狩りだされた人々は毎日自分の仕事を休み、いも飯弁当持参で朝から晩まで汗水たらしての作業。鍬くわをふるいモッコを担いで土地ならし、砂利を撒きそれをみんなでローラーを引いて固める重労働の繰り返し。使う土地は、先祖から受け継いだ大切な田もあつたものではない。」

第一飛行隊、第二飛行隊がやってきて……

高知海軍航空隊の第一飛行隊が、将校送迎用木炭バスで窪川町へ移動し、第二飛行隊は機上作業練習機・白菊を窪川町に空輸しました。

第一飛行隊の移動については、くわしい描写が残っています。(三国雄大『高知海軍航空隊 白菊特別攻撃隊』)

「七月八日、航空隊にただ一台あったバスに全員が乗り込み、窪川へ向かった。バスはガソリンが使用できなくなったため木炭車で、総勢二十八名だから、座席はがら空きだった。途中、七月四日の空襲により廃墟と化した高知市内を通った。さらに西へ進もうとしたところ、一時避難していた市民が長い列を作って高知市内に戻ってくるのに遭遇した。トラックの荷台に乗っていた人たちは、みんな防空頭巾を背負い、身一つであった。自分の家に戻り、焼け跡の整理をするのであろうか。表情は一樣に暗く、不安げだった。

高岡（現土佐市）でバスの薪を補充し、燃烧してガスが発生するのを待ち、再び出発した。途中、須崎町（現須崎市）を通った。この町の上空は「白菊」に乗ってよく通ったが、地上から見るのは初めてだ。半島とその先に点在する小島の美しい姿が隊員の目を引いた。

山道にかかって、もう一度、バスに薪を補充した。約八時間かかって、ようやく窪川飛行場に到着した。」

そして、七月十日、高知航空隊窪川飛行場が開隊しました(『高知海軍航空隊史』)。
将兵は、特別攻撃隊員と整備兵ほか約百五十人でした。

高知海軍航空隊からの三回目の特別攻撃の要員たちでした。
飛行場の西の四軒の民家が接收され、飛行隊の本部、隊員の分宿する兵舎になりました。

地元の丸山国民学校も七教室中二教室が海軍兵の宿舎にされました。

市川和男さんの家が、本部にされました。

当時、市川さんは高知市の中学校の一年生で、高知市に下宿していました。

「……下宿して間もない土日の帰郷だったと思うが、帰ってみて驚いた。

わが家の前の水田は、帯状に『木走路』といって小さな丸太木をシュロ縄で編んですたれのように敷いた即席の滑走路にすっかり姿を変えていたのである。加えて私の家も飛行場の本部になった。母一人子一人であった私たち親子は家を追われ、仕方なく隣部落の親戚に身を寄せた。

それからというもの、わが家に帰るにも、そこに駐屯している番兵に軍隊式の敬礼をして『入ってよろしいですか』と聞けという。私の母は『家の監督に來た。自分の家に入るのに、そんなことは必要はない』と言い切った。」(市川和男「四万十川塵氣楼 海軍宮内飛行場」)。

宮内の五社様の境内にはガソリンを入れたドラム缶が積まれ、銃を持った海軍兵が二十四時間見張りをしました。

宮内は四万十川沿いに北南に広がる地域ですが、地域の両方の入口には海軍の検問所が設けられました。

そこには衛兵がいて、宮内の住民も通関札を見せないと通行できなくなりました。

「五社様の弘川橋百米上手の道路に門が作られ、衛兵が立ち、部落民は、通関札を見せて通る仕末……」でした(丸山小学校百年誌編集委員会『わが母校 丸山小学校百年記念誌』。丸山小学校百年記念行事実行委員会)。

五社様あたりは飛行場の南端です。北端に近い丸山国民学校の前あたりの道路に

歩哨小屋ほしやうがつくられ、衛兵が立ちました。

何のための秘匿飛行場だったのでしょか

窪川の飛行場は、何のためのものだったのでしょうか。

「沖縄戦が始まったころ、次には米軍の日本本土進攻が必至とみられた。陸海軍は沖縄に総力を結集する一方、本土決戦に備えなければならない。その一つに、特攻機を隠蔽待機いんぺいさせておく飛行場の建設があつた。高岡郡窪川町宮内の高知第三飛行場もそれである。」(『高知空港史』。高知県。一九八四年)。

「高知基地残留の練習機白菊を最後の特攻機として使うため窪川基地に移動 隠蔽いんぺい保存した」(中山三国王『高知海軍航空隊史』)。

白菊の特別攻撃隊員だった木村芳郎さんが書いています(「海軍予備学生の記」編集委員会『海軍予備学生の記』。一九七二年)。

「第一回攻撃のために鹿屋空かのやくり「鹿児島県の鹿屋海軍航空隊」に進出したのが一九四五年「五月二十一日であつたと思う。鹿屋基地まで進出し、出撃のための整列までしたものの、私は第二回攻撃隊員訓練のために残された。毎日の空襲警報を避けて、高知県の窪川なる谷間に『隠し飛行場』を作り移動した。この飛行場も地図の上で探し、白菊による実地探査を試みて探し当てた。飛行場と言っても、畠を地ならしし、径五六センチの樫かしの棒を敷きつめただけのもの。滑走路も僅かわず一本だけ。何しろ山の間なので、安全に必要なだけの土地確保することなど、思いもよらないことであつた。ために、離陸はいつも赤ブースト「エンジン全開」でないと滑走路の前の山にブツけるおそれがあつた。(中略)谷間の飛行場で五〇〇キロ爆弾を抱いての離陸なので、上昇しきれず谷間を這はつても下降気流に落されて牛小屋に軟着したのが居いて重傷者を出し、司令から『タルンドル』と大目玉を喰つたこともあつた。」

高知海軍空隊に村が囲いこまれました

隣村の東又村の東又国民学校の訓導（教師）をしていた武市昌子さんが、当時の様子を教えてくれました。

「宮内の住人は、軍隊から宮内の住民であることを証明する通行許可証をもらいました。歩哨小屋に拳銃と銃剣を持った海軍兵がいました。私は、通勤の行き帰りは、通行許可証を首にかけました。朝五時半ころ家を出ました。丸山国民学校の所に行くとき、海軍兵がピカピカ光る銃剣を突き出して『誰か!』と叫びます。首にかけた通行許可証を出して見せると『通れ!』といって通してくれました。逃げるように走って通りました。

ここを通るのが怖くて、一度は、飛行場を横切って四万十川の浅瀬を渡って宮内を出ようと思いました。そしたら、川岸で海軍兵に捕まって、連れ戻されました」

勤務先の東又国民学校も戦場になっていました。

「アメリカ軍が、東又国民学校の周辺の山に何回も焼夷弾しょういだんを落としました。子どもたちと奉安殿ほうあんてんの近くの防空壕ぼうくうごうに入りました。

アメリカ軍が興津おきつ（四万十町）の浜から上陸してくるかもしれないといわれています。

東又国民学校でも、子どもたちに竹やりの訓練をさせました。『興津の坂からアメリカが上がってきたら、興津峠で待っていて、この竹やりで突く』ということでした」

高知海軍航空隊の操縦搭乗員・滝沢哲雄飛行中尉（予備学生十三期）も、この飛行場に配備されました。

五月二十四日、第一次白菊隊で出撃する予定で鹿児島県の鹿屋基地かのやにいきましたが、アメリカの空襲、天候不良などで出撃の順番が狂い、出撃の機会を失ったまま沖縄特

別攻撃が中止になり、窪川飛行場にまわされたのです。

アメリカ軍機来襲の情報のないときは、特別攻撃の訓練飛行がおこなわれました。滝沢さんが当時の窪川飛行場のことを語っています。

「残存の白菊は、窪川の第三飛行場の横穴へ隠しました。兵員は付近の農家への分宿です。牧場に小丸太を並べ、それが滑走路という格好の飛行場でした。空襲のありそうな時は、滑走路の上に草付きの土をばらまいたり、鶏を飼っている農場に見せかけるため唐丸カゴをあちこちに伏せてカムフラージュしたり、米軍機に発見されないよう苦労しました」（『高知空港史』）。

練習機は、四万十川上流沿い森林軌道、建設中の影野 窪川線のトンネル内にも隠蔽していました（『高知海軍航空隊史』）。

飛行場では、連日、特別攻撃訓練がおこなわれました。

飛行機が、カラコロカラコロという音をたてながら滑走路を走り、離陸していきました。

窪川飛行場は、平地にあります。四方を山に囲まれて飛行機の訓練にとっては、いい場所ではありませんでした。操縦は困難をきわめました。

武市昌子さんは『きょうは出る日だから見送ってください』といわれて、出撃する飛行機の見送りをしました。海軍兵は白いマフラーをしていました。私たちは『無事に帰って』といって見送りました。私が休みの日のことで、二、三度、見送りにいったと思います。

どこかで乗り換えて行くということでしたが、飛ぶことは飛んだが向こうまで行き着かずに帰ってきた人もいますし、行き着いたけど突撃する飛行機がなくて帰ってきたという人もいました」と、語ります。

本部にされた市川和男さんの家の庭には、塹壕せんこうがつけられました。庭の石垣には二つの四角い穴があげられ、そこから上陸したアメリカ兵を機関銃で撃つ備えがしてあ

りました。そして、裏山には、手榴弾しゅりゅうだんを投げつけるための小さな広場がつくられました。

兵隊の食糧は十分でない様子で、近くの民家のイモやカボチャが消えました。市川和男さんが、この飛行場の兵隊たちの様子を観察していました。

「兵隊さんはよく青竹のバツターで腰をしたたか打たれていたのも印象的である。『かまえ！』の命令で、殴られる型は『く』の字に腰を曲げ、上官がそれをめがけて青竹も割れんばかりに叩く。兵隊さんは前につんのめっていた。

こんなこともあった。ある将校の兵隊いじめに腹を据すえかねた江戸っ子の下士官だったと思うが、やにわに日本刀の鞘さやを払って『おれが、ぶったぎってやる！』と立ち上がり、ようやく仲間が取り押さえ、なだめていたのが今も目のそこに焼き付いている。

思えば駐屯していた兵隊さんは皆若い人達だった。青春をこの草深い檻おりなき檻の土地で持て余してもいたようだった。「市川和男 四万十川歴気楼 海軍宮内飛行場」。

模擬爆弾をつけて訓練中の白菊が墜落

七月二十五日、ここでの練習は危険だということで、第一飛行隊は日章の高知海軍航空隊に帰還しました。

窪川飛行場で二件の事故が起きたのは、その十日後の八月四日の午後でした。操縦の予備学生十三期の滝沢哲雄飛行中尉、偵察の和田実二等飛行兵曹が、白菊に百五十キログラムの模擬爆弾を二個をつけて離着陸訓練をしていました。

旋回飛行中に、エンジンの調子が悪かったのと溪谷の下降気圧に押し下げられて山腹に墜落しました。落ちたのは農家の牛小屋の上でした。留守番をしていた盲目のお

ばあさんが、はい出しました。けがはありませんでした。床下に模擬爆弾が転がって
いました。

つぎつぎと町民が現場にやってきて搭乗員の二人を何とか外に出し、木陰に寝かせ
て応急措置をしました。

滝沢飛行中尉は、目、歯、顔面に負傷、和田二等飛行兵曹は足を骨折しました。

同日、窪川飛行場を離陸しようとした練習機は、車輪を破損しました。この練習機
は、日章の高知海軍航空隊に胴体着陸しました。

高知海軍航空隊の「引渡目録」では……

終戦後に高知海軍航空隊がつくったアメリカ軍への「引渡目録」に、その飛行場の
地図などが載っています。

南北に延びた滑走路は、「砂利敷」しゃりじきで、延長千八百八十メートル、幅平均七十メー
トル
です。

誘導路が北西、西、南西の谷に延び、それぞれの谷に計四十八の掩体かくがあります。
飛行機が、どれだけ配備されていたのでしょうか。

機上作業練習機・白菊二十五機、九三式中間練習機一機、二式陸上中間練習機一機
が配備されています（計二十七機中二十三機が使用可能）。

そして、発動機が八基、三基と計十一配置されています。

九三式中間練習機は日本海軍の練習機です。

川西航空機が開発しました。機体構造は鋼管または木製骨組に羽布張りはふで後退角の
ついた上翼を持ちます。一九三四年（昭和九年）一月末に制式採用されました。全長
八・〇五メートル。全高三・二〇メートル。乗員二人。武装は七・七ミリ機銃二つ、
三十キログラム爆弾二つ。

二式陸上中間練習機は、九三式中間練習機にかわる新型の中間練習機です。

渡辺鉄工所が、海軍が研究用として戦前にアメリカから輸入していたノースアメリカンAT 六練習機を参考にして設計し、一九四三年（昭和十八年）に制式採用されました。

全長八・六〇メートル。全高四・一〇メートル。乗員数二人。武装は、七・七ミリ機銃一台。

高知海軍航空隊の「引渡目録」の窪川飛行場分の「兵器目録」には、つぎの兵器が記されています。

品名	数量	記事
二十耗機銃	五	使用可能
七耗七機銃	二十六	使用可能
小銃	百	使用可能
二十耗機銃弾薬包	五千二百	使用可能
七、七耗機銃弾薬包	十万五千	使用可能
小銃弾薬包	七百八十	使用可能
二十五番爆弾	百	使用可能
二十耗機銃弾倉	七	使用可能
七耗七機銃弾倉	五十三	使用可能
燃料車	三	使用可能一台 使用不可能二台
小型貨物自動車	一	使用不可能

占領軍に焼かれた窪川の飛行場の練習機

終戦の翌日、八月十六日、窪川飛行場では、機上作業練習機・白菊を再度組み立て、日章の高知海軍航空隊に帰還しました。一般隊員は現地解散でした（『高知海軍航空隊史』）。

市川和男さんの母が、手記を残しています。

「……この軍隊の置き土産は、四戸の家にはものすごい蚤と、天井もまっ黒になるほどの蠅の巣だった……」

高知海軍航空隊分隊長・大尉だった伊藤平次さんが、その年の冬、兵器引き渡しのため高知海軍航空隊兵舎（日章）にやってきたアメリカ兵とのやりとりを、つぎのように語っています。「窪川の飛行場の写真も見せてくれましたよ。窪川を爆撃しなかったのは、必要がなかったというだけです。」（『高知空港史』）。

窪川にやってきた占領軍は、窪川飛行場に残っていた練習機を集めて、油をかけて燃やしてしまいました。

飛行場にされて荒らされた宮内の田んぼは、戦後処理のなかで「開放地」として元の地主に払い下げられました。

一九四八年から四九年の二年ほどをかけ、復元しました。

窪川の白菊のエンジンカバー

高知市の民間の資料館、平和資料館・草の家に白菊のエンジンカバーが寄贈されています。もとは高知第三飛行場にあったといえます。

こは高知県四万十町宮内の武市典雄さんが、終戦直後に、窪川町役場の横にあった引揚事務所からもらい受けたものです（四万十町宮内は、以前は窪川町宮内でした）。

いま、四万十町窪川の飛行場跡は……

四万十町宮内は、現・JR窪川駅北西二キロメートルの四万十川のほとりにある山あいの農村です。

いまは、山あいの平地に田んぼが広がっています。

田んぼにそって道路があり、それにそって民家が並んでいます。

この田んぼの中に、かつて高知海軍航空隊の高知第三飛行場がつくられていましたが、いまは、もとの田んぼに戻されています。

平和資料館・草の家の福井康人研究員と藤原が調査しなおしたところ、えんたい掩体の跡を三十八確認しました。

このえんたい掩体は、いずれも山の斜面をけずっただけのもので、高さは四メートル、横幅七・五メートル、奥行七・五メートルほどの大きさです。残っているといっても、そのままの形で畑になったり、その後に小屋が建てられたりしたものもあります。また、一部が削り取られたものもあります。

当時を知る地元の人のお話によると、いま残っている部分はえんたい掩体全体の後ろの部分で、当時は、この山肌の削った部分より前面に木製の屋根をはり出させて軒をつくったといえます。白菊はバックさせて格納したとしました。尾翼部分が山肌の削った部分に、主翼や操縦席などの部分はその軒の下に格納されるというスタイルでした。

(平和資料館・草の家学芸員)